

シラ書10章12－18節

ヘブライ人への手紙13章1－8節、15－16節

ルカによる福音書14章1、7－14節

本日の旧約日課は、「シラ書」です。別名「集会の書」あるいは「ベン・シラの知恵」とも呼ばれています。カトリック教会と正教会では、正典に含まれ、わたしたち聖公会は、正典に準ずるものとして、日課にも含まれています。プロテスタント教会では、正典に入りませんので、礼拝で読まれることはほとんどないと思います。

シラ書は、いわゆる知恵文学という文書のグループに含まれ、格言的な知恵を語る文書です。旧約の中ではかなり後期に成立した文書に入ります。シラ書は、「**すべての知恵は、主から来て、主と共に永遠にある**」（シラ1:1）という言葉から始まり、「知恵」という言葉が、数多く出てきます。本日の個所にはありませんが、10章の最初は、「**知恵ある統治者は、その民を教育し、分別ある人の政治は、秩序あるものとなる**」（シラ10:1）とあり、王国や様々な集団で指導・管理する立場の人々に対して、知恵を重んじることを語っています。

本日の個所は、「思い上がりについて」という小見出しのある段落（シラ10:6-18）の後半部分です。6節から11節では、いついかなる時も思いあがってはならないことを教え、後半部分はその理由を主に説明しています。

本日の箇所は、「**人間の思い上がりの初めは、主から離れること、自分を造ってくださった方から、心が離れることである**」（シラ10:12）と始まりますが、「思い上がり」は、新共同訳で「高慢」と訳されていました。もともとは、「極度に輝く・表す」という意味で、自分自身の本来の状態を超えて、何かを過度に示すような行為です。日課を離れますが、シラ書と同じ知恵文学の「箴言」に「**主を畏れることは知識の初め。無知な者は知恵も諭しも侮る**」（箴言1:7）とあります。前半で「知識」と訳されている言葉は、「知恵」とも訳すことができます。『聖書（旧約）』において、主なる神様を畏れることは知恵・知識の始まりであり、また基本なのです。シラ書も同じで、13節に「**思い上がりの初めは罪であり、かたくなに罪を犯し続ける者は、忌まわしい悪事を雨のように降らせる**」とある通り、シラ書は、すべての「思い上がり・高慢」、そしてそれに伴う罪は、主から離れることから始まり、そこから悪事が絶え間なく起こると教えているのです。

13節の後半からは、「**それゆえ、主は前代未聞の災難を下し、彼らを滅ぼし尽くされたのである**」とあり、主から離れて知恵を持たなかった指導者たちへの批判が続きます。「彼ら」が誰であるか特定できませんが、その批判の中で「（思いあがった）支配者」の代わりに「謙遜な人」、「異邦の民」の代わりに「身分の低い人」が置かれることを告げます。16節以降は、異邦の民に対する批判が続きますが、具体的な集団名はなく、異邦の民とは、主なる神様を信じない人々ですから、そのように批判されているのです。18節にはこの箇所のまとめの言葉があります。「**思い上がりは、人間のために造られてはならず、激しい怒りもまた、女から生まれた者のために造られてはいない**」は、少しわかりに

くい表現ですが、原文に近い訳です。新共同訳では「人間は、高慢であってはならず、女から生まれた者は、激しい憤りを抱いてはならないのだ」となっていました。こちらは意識ですが、そうであるがゆえにこの節の主張をよく伝えています。主なる神様が造られた本来の人間は、「よし」とされた存在であるがゆえに、思いあがることはないのです。また、主なる神様によって自分が造られたことを知っているがゆえに、思いあがってはならないのです。しかし、「創世記」の冒頭が示す通り、人間は、アダムとエバからそうではなくなっていました。それゆえに、そのような人間を導くものは知恵・知識、そしてそれは「律法」からくる、「律法を守る人は、自分の思いを制し主を畏れることは、ついには知恵をもたらす」（シラ 21：11）と、シラ書は結論付けるのです。

本日の福音書は、「ある安息日に、イエスが食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったときのことである。人々はイエスの様子をうかがっていた」（ルカ 14：1）と始まっていますが、2節から6節のイエス様が水腫を患っている人を癒すお話が省略されています。それゆえ安息日論争ではなく、そのあとに続く、「誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（ルカ 14：11）というイエス様の言葉にある通り、「思いあがること」への警告と、「へりくだること」への勧めが中心となっています。それゆえに処世術のようになってしまっています。しかし、宴会にだれを招くかという部分、「宴会を催すときには、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、彼らはお返しができないから、あなたは幸いな者となる。正しい人たちが復活するとき、あなたは報われるだろう」（ルカ 14：13-14）が、単なる処世術ではないことを示します。自分自身も、そして周囲にあるすべてのもも、主なる神様が造られたのであり、そうであるがゆえに、お返しすることのできない人を招く謙虚さは、復活という永遠の命に結びつくと言っているからです。そのことは、「兄弟愛をいつも持っていなさい。旅人をもてなすことを忘れてはなりません。そうすることで、ある人たちは、気付かずに天使たちをもてなしました」（ヘブル 13：1-2）という使徒書の言葉にも共通する事柄なのです。

シラ書は、律法の大切さを強調しますが、それは律法を顧みない現実があったからです。イエス様は、律法以上の事柄を求めますが、それは律法の廃棄ではなく、律法の大前提を受け止めて、実行することを求めたからです。律法の大前提とは、人間を含むすべての存在は、神が造られたがゆえに、主なる神様の前に謙虚であるということです。

世界にある諸課題を解決するためには、まことの知恵が必要です。しかし、その知恵を知るためには、主なる神様の前での謙虚であることが求められます。そして、その知恵は、各個人を超えて、すべての教会の歩みに求められる事柄です。明日9月1日から「被造物の季節（Season of Creation）」（9/1から10/4）が今年も始まります。教会の二千年の中で、1989年からという極めて近年に始まった歩みです。この歩みにおいても、求められることの第一も、謙虚さです。「被造物の季節」の祈りを通して、教会とそこに集められる一人ひとりが、まことの謙虚さを学ぶことができるように、わたしたちの教会もそのひとつとなるように、歩んでいきたいと思います。